カンパニーデラシネラ×リー・レンシン（マレーシア）、
リウ・ジュイチュー（台湾）、チョン・ヨンド（韓国）

『Hourglass』第2回報告書
〈稽古～ショーイング編〉

鈴木理映子

身体で描く「劇」のために

筆者がカンパニーデラシネラによる集中ワークショップを初めて訪れたのは、2022年12月13日の午後。ショーイングを行う会場の上階に用意された稽古場には、平台と金属製のパイプで組まれた大きな箱状のセットが用意されていた。マレーシア、台湾、韓国から参加する出演者が来日したのは、直前の11日だが、リー・レンシン、リウ・ジュイチューの二人は昨年の『TOGE』からの続投、初参加のチョン・ヨンドも日本でのクリエイションの経験を持つとあって、チーム内にはワークショップ2日目とは思えないリラックスしたムードが漂っている。

驚いたのはこの時点ですでに、各場面の内容が固まりつつあったことだ。「じゃあ、午前中にやったところを」と演出を兼ねる小野寺修二が声をかけると、皆、サッと2人1組となり、前述の「箱」を舞台に、壁の内と外の関係――接触しているが出られなかったり、あるいはそこにある境界自体がぐにゃりと歪んだりする様子――を演じる。父を訪ねて、郊外の療養所にやってきた「私」が部屋番号を確かめながら廊下を進んでいく、台本上では「サナトリウム」と題された場面だ。原作に登場するのは「私」と病室係の女だけだが、ここでは6人3組が同時多発的に動くことで、過去と現在と未来の二人の行動が重なって見えるような効果が生まれ、数十ものドアが並び、全体像をつかむことのできないサナトリウムの閉鎖性や迷宮ぶりが伝わってくる。

聞けば、事前に小野寺が出した「お題」に対してアイデアを持ち寄り、膨らませた結果、場面ごとのイメージ、動きのパーツは、ほぼできあがってしまったのだという。そのため以後のワークショップは、出演者同士の関係性の見せ方、舞台上での位置や動くタイミング、あるいはどこをデフォルメして見せるかといった調整に費やされることになった。作品全体の調整の任を負う演出の小野寺のもと、同じ場面が何度も繰り返される様子を見ていると、次第に、動かない瞬間も含めて、舞台上のドラマは流れ続けていることを意識させられる。スムーズに動き、わかりやすく表現することはもちろんだが、ここで求められているのは、作品の世界観、舞台上にある空間、距離の感覚を、しっかり身体に格納したうえで表現することなのだろう。事前のインタビューで、小野寺がデラシネラならではの「身体言語」の探究をプロジェクトテーマにあげたこと、自分たちの作品について、ダンスやパフォーマンスではなく「無言劇」と表現したことが、徐々に腑に落ちてきた。

ショーイングの2日前、再び稽古場を訪れると、作品はほぼ完成に近づいており、全体の流れに滞りはないかを確認、調整することに多くの時間が割かれていた。ワークインプログレス公演だけに、場面を抜き出しての上演の可能性もあったはずだが、通し稽古を見ると、早足ながらも台本にあるすべてのシーンが巧みに構成され、一つの完結した作品になっている。とりわけ、複数の出演者が「私」や「父」、サナトリウムの「医者」を演じ、同じシークエンスを反復する、プロローグとエピローグの場面も繰り返しになっている――など、この作品の「時間」の描き方、あり方は独特で、だからこそ、その感覚を身体で理解し、表現することが求められているのもわかる。そこでは身体が世界観を立ち上げる筆であり、動きが文節をつくっている。

なお、ワークショップ中のコミュニケーションは、日本語と通訳を介した英語で行われた。身体表現を軸にするとはいえ、作品のイメージを共有するのに片言のやりとりだけでは足りないだろう。ましてや、デラシネラの作品では、わずかなニュアンスの違いが重要な意味を持つ。2021年から本プロジェクトで通訳をつとめる岩崎MARK雄大は俳優でもあり、作品の全体像、次の場面への動きなども共有しながら、海外からの参加者とのコミュニケーションを担っていたのが印象的だった。

稽古風景

迎えた本番。立ち見も含めた100人あまりの観客を前に、照明や音響その他の効果も交え、それぞれの演技はいっそう陰影を感じさせるものになった。宴会場にも使われるガランとした空間を敢えてそのまま見せ、幕開きには片隅の通用口から懐中電灯を持った男が入ってくる——という演出も、私たちの日常の地続きに、この奇妙な世界が存在するような、不思議な感覚をもたらした。

アフタートークで、それぞれの文化的背景と身体性の関係について聞かれ、「違いは自然にあるだろうが、意識はしなかった。ここでは身体が一つの道で、そこを通って表現が生まれてきた」(リー・レンシン)、「風土により身体は違うが、今回の経験で身体表現もまた“方法”なのだとわかった」(リウ・ジュイチュー)といった声が上がったのも、本プロジェクトのテーマ「身体言語」を考えるうえで興味深い。

小野寺は「人間の魅力をどう表に出すかが、演劇表現のベース」としつつ、「舞踊、演劇と、決め込んでいた境界が壊れて、溶けて、新しい表現に変わっていけたら」と夢を語る。今回のプロジェクトが短期間にもかかわらず、手応えを得られたのには、デラシネラの側の準備やコミュニケーションの姿勢に加え、すでに専門教育を身につけ、技術的にも精神的にも自立したパフォーマーが集った結果によるところも大きい。小野寺が描く未来のビジョンが現実に形を見せ始める時、後に続くパフォーマーたちにはどんなスキル、どんな教育や創造の環境が必要とされるのか。一つのカンパニーの活動にとどまらないテーマもここには見え始めている。

本番当日の稽古中、配信用に別撮りした映像を皆でチェックする